

危険度が増した山菜・きのこ類 魚種により基準値を上回る濃縮



獨協医科大学国際協力支援センター国際疫学研究室

木村真三

チェルノブイリでも見られた 森の恵みの汚染上昇

私の友人に伊藤延由さんという方がいます。私よりもふた周り年上です。伊藤さんは以前、福島県飯舘村に住んでいましたが、この原発事故により、応急仮設住宅での生活を余儀なくされました。

伊藤さんは事故後、自分たちの暮らしてきた飯舘村の現状を訴えるために、一生懸命、山菜やきのこ、土壌などの放射能を測り続けています。

その伊藤さんは、昨年の春あたりから、奇妙な現象が起きていることに気がつきました。「それまで順調に下がっていた山

菜の放射能が、なぜか種類によつては逆に上昇してくるものが出始めた」とのこと。不思議に思い、私に相談してきました。

私は、すかさずチェルノブイリの汚染地域にある森のことが頭に浮かびました。福島第一原発事故以前から、住民への内部被ばく低減化のために、足しげく通っているウクライナ国ジトーミル州ナロージチ地区のことです。

チェルノブイリ原発から約70 kmに位置し、事故後、毎時30ミリシーベルトの放射能雲（飛散した微細な放射性物質が、大気に乗って雲のように流れていく現象）が通過したことが確認されています。

この地域では、今も森林の汚染が続き、そこで採れるベリー類やきのこは放射能を濃縮し、信じられないくらい高い数値をはじき出しています。

なぜ、こうした現象が起きるのか。私の共同研究者であるジトーミル国立農業生態学大学のムイコラ・デイドウフ所長は、「森の循環が放射性セシウムを濃縮し、さらに土壌の表面に放射能汚染の強い有機層が出来上がる」と言います。

何よりも大切なのは 測ること、知ること

「世間では、あれから3年、もう3年って言いますが、私ら

からすれば、まだ3年なんてすよね」。これは、事故から3年目を迎えた2014年、二本松市教育委員会の小泉裕明委員長が言われたことです。「喉元を過ぎたら忘れてしまう」ということにならないようにしていくのが、この記事を読んでくださった方々へのお願いです。

事故からまだ4年しか経っていないのに、「危険だ」「大丈夫だ」といった判断はできません。すべての検査が終わっていない段階で「心配ない」と断言するような証拠はどこにもありません。だから「測ること」「知ること」「記録すること」が重要だ、というのが二本松市の方針です。

測られ売られている食品 独自の規制値で安全確保

スーパーマーケットなどで売られている福島県産の食品は、お米は全袋検査、その他、野菜などは、すべての種類に

木と土とを循環する放射性物質

放射性物質は根から吸い上げられ、養分とともに葉っぱにたまります。秋に落ち葉になり、何回か冬を迎えると腐って、また木に吸い上げられます。こうして放射性物質は地面と木の間を回ることになります。



きのこ・コシアブラ・ベリー類は放射性物質を集めやすいよ。ほかにも調べてみてね。

表 飯舘村でとれた山菜・きのこの放射性セシウム
(前年より放射能濃度が上昇したもの)

品 目	2014年 (Bq/kg)	2013年 (Bq/kg)	備 考
山ウド	103	72	2012年81Bq/kg 飯舘村小宮野手上 産
タラの芽	779	320	飯舘村小宮沼平 産
シドキ(モミジカサ)	515	158 230	飯舘村小宮野手上 産
コゴミ(クサソテツ)	6004	197	飯舘村小宮野手上 産
マツタケ	7244	3032	飯舘村小宮野手上 産
イノハナタケ	2万1410	3823 5892	飯舘村小宮野手上 産



シドキ(モミジカサ)



コゴミ(クサソテツ)



イノハナタケ

続いている海の汚染 モニタリングが重要

査を受けて出荷されています。風評被害に立ち向かうべく、福島県内の生産者は努力を惜しみません。測ることが安全を担保できる唯一の対策なのです。

辺の海水と海底土を採取しました。採取した試料は、採取量や汚染レベルによりゲルマニウム半導体検出器の計測時間を8時間から84時間まで変化させながら分析を行いました(注・汚染レベルが低いほど長時間の計測が必要)。

14年10月20日、私と東京新聞の合同調査*1で、地元の相馬双葉漁協の協力により、原発周

その結果、港湾入口の海水からは1ℓ当たり1・07 Bqのセシウムを検出しました。13年の

調査に比べると海洋汚染のレベルは、3分の1以下に減少しています。しかし、これは調査直前に本州を縦断した台風18号と19号の影響で放射能が拡散したことを意味します。

原発近くの海洋汚染レベルは、きわめて低いと思われていますが、決してそうではありません。なぜならば、海洋学者・笠松不二男氏の1999年の論文「海洋生物と放射能」(RADIOISOTOPES, 48(4), 266-82)によると、日本沿岸域に生息する魚介類におけるセシウム137の濃縮係数(生物中濃度/海水中濃度)は、もっとも高い魚種で平均122±12と報告しています(注・魚に海水中のセシウムが約122倍濃縮される)。

このことは、たとえ海水の汚染度が1 Bqでも、魚種によつては、食の安全基準値を上回る濃縮が起ることを意味します。今後も、モニタリングを続ける必要があるのです。

*1 東京電力は、原発の放水口近くの汚染測定をきわめて時間が短い簡易測定で行っていたため、「検出せず」と公表してきた。しかし、今回の詳細分析では、採取した試料の7・8割でセシウムが検出された。2012年には4Bq近い汚染があったが、東電の測定では、検出されていなかった(14年12月5日付・東京新聞)。

木村真三(きむら しんぞう):1967年愛媛県生まれ。放射線衛生学者。2000年北海道大学博士号(地球環境科学)。11年8月より獨協医科大学准教授、ジトーミル国立農業生態学大学名誉教授号。福島第一原発事故直後に現地で放射線量を測定し、その様子を伝えたNHK ETV特集「ネットワークでつくる放射能汚染地図」が反響を呼んだ。